



平安だより

世田谷平安教会付属平安幼稚園
2018年5月号

「西郷どん」

牧師・園長 長村亮介

「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬ可し」

ここに「天」という言葉が出てきます。普通、孔子の教えである儒教の世界では、この「天」は、人間を超越した力の源、あるいは、世界をすべ治める法のようなものとして理解されていたようですが、その実態は、人間の知恵では到底理解できない存在として、中国でも日本でも崇められてきたのです。

しかし、ここで西郷が言う「天」は、人間と交わりをする人格のある存在として、儒教に出てくる茫漠とした「天」の概念とは明らかに違うものとして表れています。「天を相手にせよ」とは、すべてのものの根源であり、すべてのものを創造された絶対者なる神に人生の生き方を指導してもらいなさい、という意味だと考えてもよいでしょう。キリスト教では、この絶対者を「創造主なる神」として崇め、礼拝するのですが、西郷にとっても、「天」は、そのような礼拝する対象として受け止められていたと考えられます。

ですから、「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬ可し」という人生訓も、「天を相手にして」という項が、最も、西郷が言いたかった点で、この前提がなければ、この西郷の言葉は「人生、精一杯努力して、人を批判することをやめ、いつも自分の至らなさを反省して生きなさい」といった、ごく平凡な人生訓で終わってしまふのです。

（『西郷隆盛と聖書』 守部喜雅 著）

NHKの大河ドラマで、今「西郷どん」が放映されています。西郷隆盛は、実はクリスチャンであつたらしいのです。しかも、明治維新に活躍した人々の中には、キリスト教の信仰に入った人は少なくないのですが、西郷は西南戦争で非業の死を遂げる前、鹿児島島の川邊家で、漢訳聖書を教えていたと言っています。

私にとって西郷さんと言えば、「上野の森の西郷さん」と犬連れ立ったその銅像に親しみを覚える反面、征韓論を推し進めた好戦的な政治家というイメージもあつて、実のところよく分かりません。ただ西郷は平和的解決を第一に考えていて、「征韓」などということは念頭になかつたともあります。西南戦争の経緯についても、西郷は誤解をされたまま、その最期を受け入れたのではないかということなのです。内村鑑三は、西郷がクリスチャンであつたなどということは知るはずもなかつたと思いますが、彼の生涯の生き方を高く評価していて、西郷がその死を生きた理由が分かるには、あと百年はかかるだろうと記しています。内村も孤高の信仰者でしたが、同じ信仰に生きた者の、何か相通じるものがあるのかも知れません。

「人を相手にせず、天を相手にせよ」というのは、この世的には孤独な生き方になることもあると思います。私たちにとって、誰かに理解されたいという願いは、とても強いものですが、また人は一人で生きて行けるほど強くないとも思います。しかし「天を相手にして」と言うとき、それは決して独り善がりなことではなくて、創造主なる永遠の神さまと共に生きる、時や場所、そして自分にも囚われない新しい世界が、私たちの前に広がるような気がします。そして実は、私たちが生きているこの時代は、未だ理解されていない、天を相手に生きた人々の礎の上に成り立っているのではないのでしょうか。聖書の御言葉を聞く時、神さまにお祈りをする時、私たちの前にも、子どもたちの前にも、新しい神さまのおられる世界が、広々と広がるようにと思います。